

干潟生産力改善モデル事業 -

丸山拓也・水野知巳・藤田弘一・坂口研一・太田吉彦・落合 昇

目的

三重県伊勢湾海域でのアサリ漁獲量は 1980 年代は 10,000 t 前後で推移していたが、2001 年以降は 5,000 t 未満と低迷している。本事業では伊勢湾内のアサリ漁獲量の減少課程の把握と、アサリの天敵であるツメタガイ類に関する基礎的知見を得る。

方法、結果と考察

1. 漁場変遷調査

県内の伊勢湾海域の漁協を対象に 1970-2005 年のアサリ漁獲量を調査した。漁場の変遷について赤須賀、磯津、楠、鈴鹿、白塚、香良洲、松阪、下御糸、大淀、村松、東豊浜、今一色地区で聞き取り調査を行った。

アサリの漁獲量や漁場面積は特に河口付近で大きく減少していた。主に河口や干潟域で操業する地区では過去に年間 1000 t 以上の水揚げを記録した地区がみられた。しかし 1970 年代以降、勢田川、櫛田川、宮川、木曾三川などの河口域では、漁場面積や漁獲量が大きく減少した。これら河口周辺の漁場が不適化した原因は様々であるが、河口周辺漁場の劣化が近年のアサリ漁獲量の低迷に大きく関わっていると類推された。

2. ツメタガイ類

1) 分布調査

アサリ漁業混獲物調査と聞き取りによりツメタガイ類の生息状況を調査した。

アサリ漁業で採集されるタマガイ科はツメタガイ、サキグロタマツメタ、ハナツメタ、エゾタマガイ、アダムスタマガイの 5 種で、他にネコガイ、アカニシ、キセワタガイなどの肉食貝類が確認された。ツメタガイは伊勢湾全域の漁場で棲息が確認された。サキグロタマツメタは勢田川河口干潟、松名瀬干潟、五主干潟など伊勢湾中央以南の河口や河口に隣接した干潟で多く確認された。また松阪以北でのサキグロタマツメタの採集例はほとんどなかった。他のタマガイ科の詳細な分布は不明であるが、採捕状況からみると資源量は少ないと考えられた。

2) 夜間干潟徒手採集

2006 年 12 月、2007 年 1 月の夜間大潮干潮時に松名瀬、五主干潟にて定線徒手採集調査を行い、サキグロタマツメタの感潮帯における分布状況を調査した。採集は原則 4 名で行い、各員左右 1 m を調査範囲として定線上を調査した。

両干潟とも干潮線近くの潮溜まりで多く採集され、とくに五主干潟の沖側南端付近の潮溜りでは、1,000m² 当たり平均 14.8 個体のサキグロタマツメタを採集した。

3) 標本船調査

ツメタガイ類の漁場での分布と取り除き効果を把握するため、松阪漁協の貝桁網、長柄鋤簾、腰曳き鋤簾それぞれ 2 経営体（のべ 6 経営体）にツメタガイ類の混獲量の記帳を依頼した。貝桁網では 7-9 月の 32 日間の操業で捕獲効率は約 3 割にまで低下した。貝桁網は一度に広面積を浚い、また操業区域が限られているため効率的に除去が行われたと思われる。腰曳きや長柄での捕獲効率は操業 1 時間あたり数個体であったが、全体として捕獲効率は下降傾向にあった。

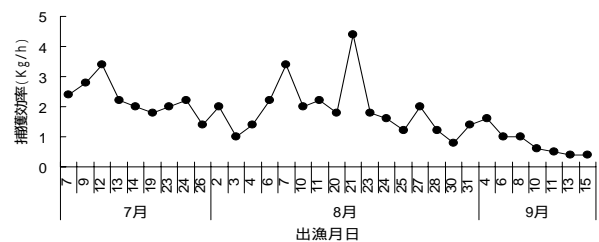


図 1. 松阪漁協貝桁網漁におけるツメタガイの捕獲効率

鈴鹿市漁協のポンプ貝桁漁に同乗し、ツメタガイの分布状況を調査した。曳網距離からツメタガイの生息密度を推定したところ、箕田・長太地区の漁場で 8.2 個体/100m² であり、若松地区の漁場では 1.0 個体/100m² 対して白子地区沖側の漁場では 0.3 個体/100m²、陸側では 0.2 個体/100m²、と北の漁場ほどツメタガイの採集効率が高かった。

関連報文

三重県化学技術振興センター 水産研究部 鈴鹿水産研究室；平成 18 年度干潟生産力改善モデル事業報告書